

特別支援教育に関する研究

特別支援学級における授業の充実

平成25・26年度



茨城県教育研修センター

目 次

1	研究を進めるにあたって		
(1)	主題設定の理由	-----	1
(2)	研究の目的	-----	2
(3)	研究の内容及び方法	-----	3
2	「授業評価・改善ツール」について		
(1)	授業評価表	-----	5
(2)	授業分析シート	-----	7
(3)	授業改善提案シート	-----	8
(4)	授業改善シート	-----	9
(5)	授業評価表(改善後)	-----	10
3	授業研究の充実に向けて		
(1)	授業研究について	-----	11
(2)	授業研究の方法	-----	13
4	授業改善のプロセス	-----	18
5	授業改善実践事例集について	-----	21
6	研究のまとめと今後の課題	-----	24
7	参考・引用文献	-----	31

研究協力員, 茨城県教育研修センター職員一覧

1 研究を進めるにあたって

【研究の概要】

本研究は、特別支援学級や通級指導教室（以下、特別支援学級等という。）における授業の充実を図るために、P D C Aサイクルに基づき、改善の視点を焦点化した授業改善の在り方を提案することを目的とした。平成 23・24 年度の研究「特別支援学級における授業の実際」（以下、前研究という。）の「特別支援学級スタート応援ブック～授業づくり編～」を踏まえ、「授業づくりの 8 つの視点」を基に授業評価の観点を設定することで、改善の視点を焦点化できるように「授業評価・改善ツール」を作成した。特別支援学級等担当者（特別支援学級担任、通級指導教室担当者、以下、担当者という。）が、自己の授業評価や参観者による授業評価の結果から改善の視点を焦点化し、授業改善を行い、次の授業を計画・実施できるようにすることで、特別支援学級等における授業の充実を図りたいと考えた。

（1） 主題設定の理由

平成 25 年 3 月の国立特別支援教育総合研究所による「インクルーシブ教育システムにおける教育の専門性と研修カリキュラムの開発に関する研究」の報告では、「（前略）特別支援学校、特別支援学級、通級による指導は、障害のある子どもたちが、より専門的な指導を受けられる場として用意されたものであり、そこで指導を担当する教員は、子どもと関わる基礎的な指導力とともに、障害のある子どもへの指導に対して高い専門性が求められている。」と述べられている。さらに、「インクルーシブ教育システム構築のための特別支援学校、特別支援学級、通級による指導を担当する教員に求められる専門性を『障害のある子どもの指導に関する専門性』と『関係者との連携に関する専門性』に整理した。」と示され、「障害のある子どもの指導に関する専門性」については、「① 障害の特性の理解と指導」、「② 子どもの実態把握とアセスメント」、「③ 個別の指導計画の作成」、「④ 学級づくり・授業づくり」の 4 つが挙げられている。各担当者の専門性を向上していくことが喫緊の課題となっている。

本県の平成 26 年度学校教育指導方針にも、幼、小・中学校、中等教育学校、高等学校における特別支援教育の充実の努力事項「1 一人一人の教育的ニーズに応じた指導の充実」の中で、その具現化のための取組として、「特別支援学級・通級指導教室における指導の充実」が挙げられており、担当者の授業力の向上が求められている。本教育研修センターでも、担当者を対象とした研修講座や校内研修支援事業を通して、「児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた授業力の向上」を目指している。

前研究においては経験の少ない担当者の授業力、学級経営力の向上を図りたいと考え、手引書となる「特別支援学級スタート応援ブック」（以下、「応援ブック」という。）を作成した。その背景には、初めて特別支援学級や通級指導教室の担当となる教員が非常に多くなっていることや専門的な助言を受ける機会が日常的に少ない中、戸惑いや不安を抱えながら、日々の指導にあたっている担当者が多いという状況があった。「応援ブック」は本教育研修センターのWebページからダウンロードが可能になっている。

前研究では今後の課題として、資料1に示す3つの点を挙げた。

資料1 前研究の課題

- ・より多くの特別支援学級等担当者に、「応援ブック」を活用してもらうこと
- ・本教育研修センターで実施している「新任特別支援学級・通級指導教室担当者研修講座」をはじめ、特別支援教育に関する各研修講座において、「応援ブック」をテキストとして有効活用していくこと
- ・「授業づくりの8つの視点」について、内容をさらに深めていくとともに、授業改善の視点での実践的研究を進めていくこと

一つ目の課題については、今年度の研修講座や校内研修支援事業の際に、「応援ブック」の活用の周知に努めている。二つ目の課題については、「新任特別支援学級・通級指導教室担当者研修講座」や「特別支援学級・通級指導教室担当者指導力向上研修講座」等において、個別の指導計画の作成や特別支援学級の授業づくりの研修の際にテキストとして活用しているところである。

本研究では前研究の三つ目の課題を受けて、「授業づくりの8つの視点」を基にした授業改善についての実践的研究を進めていくこととした。前研究では、特別支援学級等における基本的な授業づくりの考え方や方法を「応援ブック」に示した。担当者は「応援ブック」を参考にして、授業づくりができる。本研究では、授業づくりのPDCAサイクルに基づき、授業改善を進める際の手立てとして、授業評価、改善の視点の焦点化、具体的な改善策の検討をするための「授業評価・改善ツール」を作成した。「授業評価・改善ツール」を活用することで、客観的な視点から自己の授業を振り返り、日々の授業を改善していくことができると考えた。また、授業研究の方法を示すことで、より効果的に授業改善に取り組むことができると考えた。本研究の研究協力員による「授業評価・改善ツール」を活用した授業研究を基に、授業改善の在り方について提案する。

担当者が本研究による提案を参考にして授業改善を進めることで、特別支援学級等における授業の充実が図れるものと考え。特別支援学級等の授業の充実が特別な教育的ニーズのある児童生徒の生きる力の向上につながるものと考え、研究主題を設定した。

(2) 研究の目的

本研究では、特別支援学級等における授業の充実を図るために、PDCAサイクルに基づき、改善の視点を焦点化した授業改善の在り方を提案することを目的とした。

(3) 研究の内容及び方法

特別支援学級等における授業づくりは、図1のようにPDCAサイクルを進めていく。担当者には、このサイクルに基づき、よりよい授業づくりを目指すことが求められる。常に授業を改善しようとする努力が、「一人一人の教育的ニーズに応じた指導」につながり、児童生徒の豊かな学びを実現し、授業の充実を図ることができると思う。

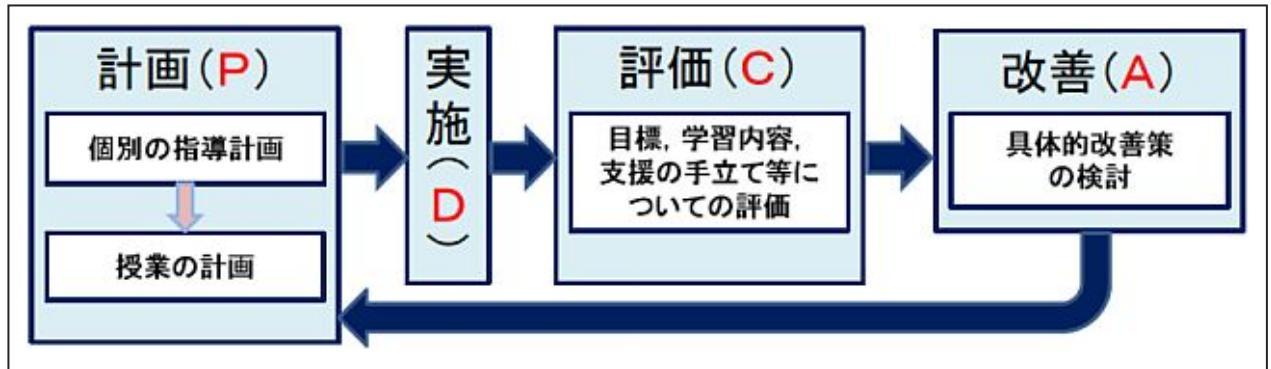


図1 PDCAサイクルによる授業づくり

授業改善を進める際に、「実施した授業には、どんな課題があり、それをどのように改善していけばいいのかわからない。」という悩みをもつ担当者が多い。実施した授業の目標、学習内容、支援の手立て等が児童生徒の学びに適切であったのか、教員の指導の妥当性を評価する方法が必要になる。評価を実施することで、授業におけるいくつかの課題が明らかになる。明らかになった課題の解決に向けて、より具体的な改善の内容を検討するためには、どの課題を中心に改善を進めるのか、焦点化を図ることが必要になる。

「応援ブック」では、授業づくりを進めていく際に大切にしたいポイントを「授業づくりの8つの視点」(図2)とした。本研究を進めるにあたって、この「授業づくりの8つの視点」を基に授業評価の観点を設定した。設定した観点で授業評価をすることで、8つの各視点についての成果や課題が明らかになり、課題の中からどの視点の内容を中心に改善をしていくのか選択することで、焦点化を図ることができる。焦点化した視点について、具体的な改善策を検討し、その内容を生かしながら次の授業を計画することで、PDCAサイクルに基づいた授業改善が進められると考える。

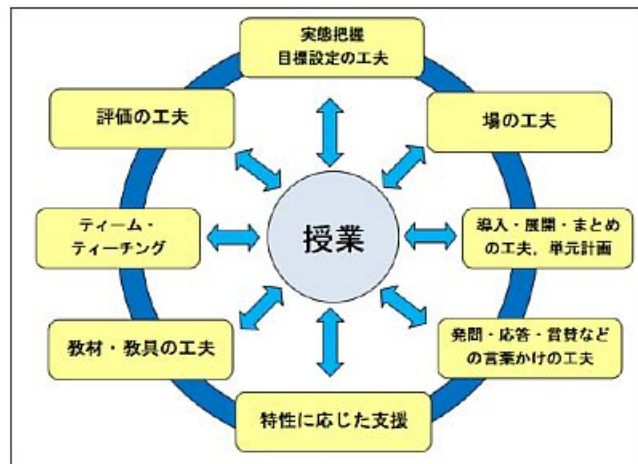


図2 授業づくりの8つの視点

そこで本研究では、授業改善を進める際の手立てとして、表1に示した「授業評価・改善ツール」を作成した。「授業評価・改善ツール」は、「授業づくりの8つの視点」を基に評価の観点を設定した「授業評価表」、視点ごとの数値での評価の合計を比較し、焦点化の

参考とするための「授業分析シート」、授業者や参観者が改善策を提案するための「授業改善提案シート」、具体的な改善策を検討するための「授業改善シート」の4種類のシートで構成した。この「授業評価・改善ツール」を活用した授業改善のプロセスについて提案する。

本研究では、特別支援学級担当の小学校教諭4人・中学校教諭2人，特別支援学校教諭2人による研究協力員計8人が「授業評価・改善ツール」を活用した授業改善に取り組み，各2回の授業研究を実施した。その取組を基にして，授業改善の在り方について提案する。

また，研究協力員の授業改善の内容は，「授業づくりの8つの視点」ごとに授業改善実践事例集としてまとめた。

表1 授業評価・改善ツール

授業評価表
授業分析シート
授業改善提案シート
授業改善シート

2 「授業評価・改善ツール」について

授業改善を進める際の手立てとして作成した「授業評価・改善ツール」の各シートについて説明する。

(1) 授業評価表

資料2は授業評価表（授業者用）である。「応援ブック」の「授業づくりの8つの視点」の内容を基に、評価の観点を設定した。「応援ブック」には授業づくりの内容が、各視点に多数示されている。どの内容も大切であり、評価の観点として取り上げたいものである。しかし、あまりに多数の観点を設定しても、評価に多くの時間を費やすことになる。授業改善を日々継続していくことを考えると、観点数の調整と各視点の内容の絞り込みが必要であると考えた。各視点の評価を相対的に比較するために2つずつの観点を設定し、合計16の観点とした。内容については、各視点の中でも基本となる大切なものに絞った。

各観点には、数値による評価とその評価の根拠となる成果や課題等を記入する。評価規準は、5段階（5：十分達成している、4：達成している、3：どちらともいえない、2：改善が必要である、1：大いに改善が必要である）とした。各観点を5段階評価とすることで、各視点の合計は最高10点となるようにした。

授業者は授業終了後に自己の指導を振り返り、各観点の評価を記入するとともに、「反省」の欄には、成果や課題（次の授業に向けて改善したい点）を記述する。

また、授業研究等で参観者が評価を実施する際には、様式の「反省」の欄を「気付き（よかった点、改善点）」に、「自己の指導を振り返って」の欄を「全体をとおしての所見（感想、意見、質問等）」に変更し、参観者用として活用する。「気付き」の欄には、評価の根拠とするために、児童生徒の様子を観察し、その際に行った授業者の指導や支援について記述していくことが必要である。

資料2 授業評価表

授業評価表(授業者)			
単元・題材名	平成 年 月 日 ()		授業者
授業実施日時		時間 (: ~ :)	
評価の観点		評価	反省
1	本単元(題材)及び本時の授業の内容に関する児童生徒の実態を把握し、指導案に明記している。	3	実態把握・目標設定の工夫
2	個々の実態を踏まえ、観察や評価が可能な具体的な目標を設定している。	4	
3	本時の目標を達成するために、効果的な学習環境になっている。	2	場の工夫
4	分かりやすい板書や提示(構成、文字の大きさ、配色、タイミング等)になっている。	2	
5	学習活動(導入・展開・まとめ)が、設定した時間配分で展開できている。	4	導入・展開・まとめの工夫、単元計画
6	本時の目標に沿った導入・展開・まとめの流れになっている。	3	
7	児童生徒に分かりやすい発問や指示ができています。(内容、量)	3	発問・応答・賞賛などの言葉かけの工夫
8	児童生徒の動き、反応、様子に対して具体的にタイミングのよい言葉かけ(応答、賞賛、励まし等)ができています。	3	
9	個々の実態に応じた支援の手立てを指導案の展開に明記し、実践している。	3	特性に応じた支援
10	本時の目標を達成するために、児童生徒の得意なことを生かす支援をしている。	2	
11	児童生徒が興味・関心をもち、主体的に取り組める教材・教具である。	3	教材・教具の工夫
12	個々の実態に応じた教材・教具を活用している。(色、大きさ、難易度、量等)	3	
13	TT間の共通理解のもと、適切に役割を分担し、指導を進めている。	3	チーム・ティーチング
14	児童生徒の活動に応じて、TT間で連携や協力をしている。	3	
15	設定した目標の達成状況を客観的に把握するための評価方法を取り入れている。	4	評価の工夫
16	本時の授業における目標・活動・評価に一貫性がある。	3	

自己の指導を振り返って

参観者用：全体をとおしての所見（感想，意見，質問等）に変更

参観者用：気づき（よかった点，改善点）に変更

【評価規準】 5:十分達成している 4:達成している 3:どちらともいえない 2:改善が必要である 1:大いに改善が必要である

評価規準：5段階で評価する。

(2) 授業分析シート

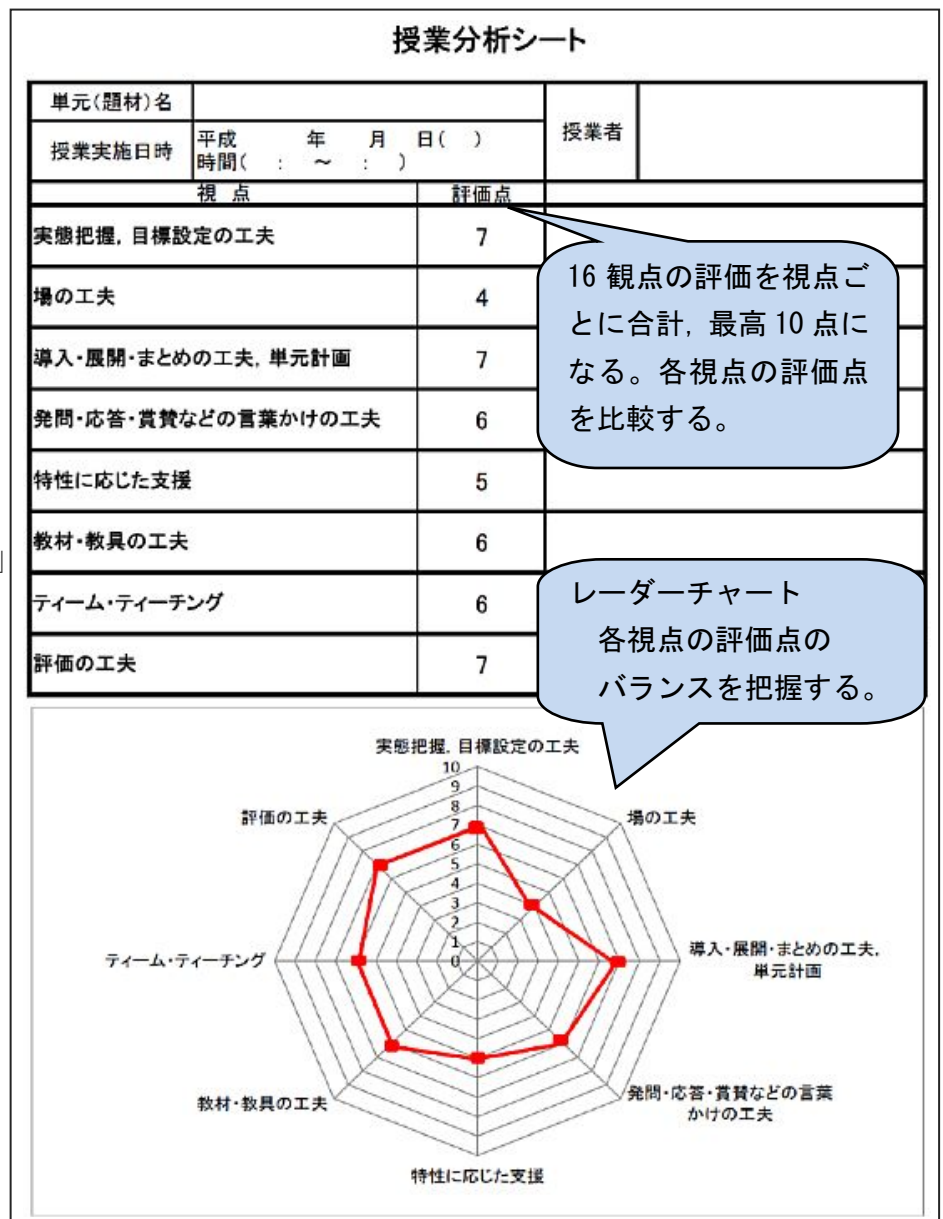
資料3の授業分析シートは、改善の視点を焦点化する際の参考として活用する。資料2の授業評価表では16の観点で評価をしているので、授業分析シートでは各視点の2つの観点の評価を合計した評価点（最高10点）を算出する。算出した結果を各視点の評価点の欄に記入する。結果を比較した際に、評価点の低い視点には多くの課題があると考えられるので、改善の視点として焦点化し、具体的な改善策を検討する。

また、各視点の評価点のバランスを見ることも必要である。「応援ブック」(P23)に示したように「授業づくりの8つの視点」は密接に関連している。各視点の関連を考慮しながら、焦点化する方法もある。そこで、各視点の評価点のバランスを視覚的に把握できるように、授業分析シートの下段には、評価点をレーダーチャートで示す。

例えば、レーダーチャートにおいて、評価点の低い視点が2つ見られた場合には、その2つを改善の視点とし、関連させながら改善を進めていくこともできる。資料3のレーダーチャートのように「場の工夫」と「特性に応じた支援」の視点に評価点の低さが見られた場合には、「対象となる児童生徒の得意なことを生かす学習環境を設定する。」という改善策が考えられる。さらに、「視覚優位の特性があれば、板書の掲示を工夫する。」など、改善策がより明確になる。

参観者の授業評価表の気付きの欄には、改善のアイデアやヒントとなるものが記述される。評価点だけではなく、参観者からの意見を参考に、改善の視点を焦点化していくこともできる。

資料3 授業分析シート

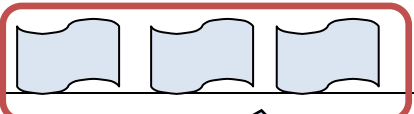
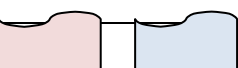





(3) 授業改善提案シート

資料4は授業評価表の形式を基に作成した授業改善提案シートであり、授業研究の際に活用する。授業評価表の観点で、授業者や参観者の意見を整理したいと考えて作成した。参観者は各自の授業評価表を基に授業改善提案シートの「改善点(自分ならこうする)」の欄に意見を記述する。また、授業改善提案シートを拡大印刷することで、参観者の意見を記述した付箋を貼付することもできる。成果と課題等を別な色の付箋に記述して区別することで、意見が整理しやすくなる。

授業研究の際に、拡大印刷したシートを廊下等の壁面に掲示することで、意見を記述した付箋を貼付できる。協議に参加できない参観者の意見を収集し、具体的な改善策を検討する際に参考にできる。課題の付箋が多く貼られている評価の観点から改善の視点を焦点化し、具体的な改善策を検討していくことができる。

資料4 授業改善提案シート

単元・題材名			
授業実施日時		平成 年 月 日 () 時間 (: ~ :)	指導者
評価の観点		改善点(自分ならこうする)	
1	本単元(題材)及び本時の授業の内容に関する児童生徒の実態を把握し、指導案に明記している。	 課題の付箋が多く貼られた項目について検討する	
2	個々の実態を踏まえ、観察や評価が可能な具体的な目標を設定している。		
3	本時の目標を達成するために、効果的な学習環境になっている。		
4	分かりやすい板書や提示(構成、文字の大きさ、配色、タイミング等)になっている。		
5	学習活動(導入・展開・まとめ)が、設定した時間配分で展開できている。		
6	本時の目標に沿った導入・展開・まとめの流れになっている。		
7	児童生徒に分かりやすい発問や指示ができています。(内容、量)		
8	児童生徒の動き、反応、様子に対して具体的でタイミングのよい言葉かけ(応答、賞賛、励まし等)ができています。		
9	個々の実態に応じた支援の手立てを指導案の展開に明記し、実践している。		
10	本時の目標を達成するために、児童生徒の得意なことを生かす支援をしている。		
11	児童生徒が興味・関心を持ち、主体的に取り組める教材・教具である。		
12	個々の実態に応じた教材・教具を活用している。(色、大きさ、難易度、量等)	意見を記述した付箋を貼付する。 (色分けの例) ピンク：成果 水色：課題	
13	T・T間の共通理解のもと、適切に役割を分担し、指導を進めている。		
14	児童生徒の活動に応じて、T・T間で連携や協力をしている。		
15	設定した目標の達成状況を客観的に把握するための評価方法を取り入れている。		
16	本時の授業における目標・活動・評価に一貫性がある。		

(4) 授業改善シート

資料5の授業改善シート（「場の工夫」の例）は、授業者が授業分析シートを参考に焦点化した改善の視点について、具体的な改善策を検討する際に活用する。アの欄には、各視点の評価の観点、観点ごとの評価とそれらを合計した評価点を記入する。イの欄の左側には授業中の児童生徒の様子と改善したい点を記述する。イの欄の右側には具体的な改善策を検討し、記述する。改善策を検討する際には児童生徒の様子が参考になるので、詳細に観察し、記録しておくことが重要になる。授業評価表や授業改善提案シートの記述も参考にしながら、具体的な改善策を記述することで改善の方向性が明確になり、その内容を次の授業の計画に生かせると考えた。

資料5 授業改善シート

授業改善シート			
単元(題材)名	指導者	評価	評価点(最高10点)
視 点	評価の観点		評価点(最高10点)
場の工夫	本時の目標を達成するために、効果的な学習環境になっている。	2	4
	分かりやすい板書や提示(構成、文字の大きさ、配色、タイミング等)になっている。	2	
<small>【評価規準】 5:十分達成している 4:達成している 3:どちらともいえない 2:改善が必要である 1:大いに改善が必要である</small>			
本時の目標を達成するために、効果的な学習環境になっている。 <div style="float: right; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 5px;">P31</div>			
児童生徒の様子、改善したい点		具体的改善策	
		<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; display: inline-block;">「応援ブック」の関連ページ</div>	
<small>分かりやすい板書や提示(構成、文字の大きさ、配色、タイミング等)になっている。</small>			
児童生徒の様子、改善したい点		具体的改善策	
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; display: inline-block;">授業中の児童生徒の様子と改善したい点を記述する。</div>		<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; display: inline-block;">次時の授業に向けた改善策を記述する。</div>	
視 点	新たに追加した評価の観点		
場の工夫	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; display: inline-block;">追加した評価の観点は、資料6の授業評価表のA・Bの欄に記述する。</div>		

(5) 授業評価表 (改善後)

改善後の授業について評価する際には、授業者が改善した内容を基に評価の観点を追加することができるようにした。授業評価表の観点は、各視点の中でも基本となる内容に絞っているため、改善した内容が16の観点では評価できない場合がある。改善の内容を反映させた新たな評価の観点を設定し、その観点を評価することで、改善の取組が児童生徒の学びに適切であったのかを確認できる。資料5のウの欄には、追加した観点を記述し、追加した観点は資料6の改善後の授業で活用する授業評価表の下段A・Bにも記述する。

資料6 改善後の授業で活用する授業評価表

授業評価表(授業者)			
単元・題材名	平成 年 月 日 ()		授業者
授業実施日時	時間 (: ~ :)		
評価の観点		評価	反省
1	本単元(題材)及び本時の授業の内容に関する児童生徒の実態を把握し、指導案に明記している。		
2	個々の実態を踏まえ、観察や評価が可能な具体的な目標を設定している。		
3	本時の目標を達成するために、効果的な学習環境になっている。		
4	分かりやすい板書や提示(構成、文字の大きさ、配色、タイミング等)になっている。		
5	学習活動(導入・展開・まとめ)が、設定した時間配分で展開できている。		
6	本時の目標に沿った導入・展開・まとめの流れになっている。		
7	児童生徒に分かりやすい発問や指示ができています。(内容、量)		
8	児童生徒の動き、反応、様子に対して具体的にタイミングのよい言葉かけ(応答、賞賛、励まし等)ができています。		
9	個々の実態に応じた支援の手立てを指導案の展開に明記し、実践している。		
10	本時の目標を達成するために、児童生徒の得意なことを生かす支援をしている。		
11	児童生徒が興味・関心をもち、主体的に取り組める教材・教具である。		
12	個々の実態に応じた教材・教具を活用している。(色、大きさ、難易度、量等)		
13	T1、T2の共通理解のもと、適切に役割を分担し、指導を進めている。		
14	児童生徒の活動に応じて、TT間で連携や協力をしている。		
15	設定した目標の達成状況を客観的に把握するための評価方法を取り入れている。		
16	本時の授業における目標・活動・評価に一貫性がある。		
A			
B			
自己の指導を振り返って			

資料5のウの欄に追加した観点を記述して、活用する。

【評価規準】 5:十分達成している 4:達成している 3:どちらともいえない 2:改善が必要である 1:大いに改善が必要である

3 授業研究の充実に向けて

授業研究は、授業改善のためには不可欠なものである。授業研究は校内研修や研究会で行うことが多く、複数の教員で授業を参観し、意見を交換し合うことは参加者の授業力の向上につながる。どんなに周到に見える授業でも更なる改善の方向性が見えてくる。充実した授業研究を実施するためには、参加者全員が目的や方法、ルールを十分に把握することが重要である。

(1) 授業研究について

① 授業研究とは

授業の計画、実施、評価、改善という授業づくりの各過程（PDCA）やそのプロセス全体について、個人又は複数の教員で分析し、検討することである。授業は多様な要素が複雑に関係している。授業を通じた児童生徒の変容について様々な角度から分析し、お互いの意見を交換する。授業者と参観者がそれぞれの授業評価を基に、学習指導案に計画された指導目標や指導内容の妥当性、実施された授業における支援の手立てや児童生徒の様子を協議することで改善策を考え、次の授業の質的な向上を図ることである。

② 授業研究の目的

授業研究を実施することで、授業改善を図り、日々の授業における児童生徒全員の豊かな学びを実現する。また、協議における意見交換を通して、授業者や参観者の授業力及び教員同士で互いに学び合い支え合う意識を向上させることである。

③ 充実した授業研究にするために

- ・全員が参加し、教員同士が学び合う授業研究（同僚性）
- ・授業づくりの視点が共有されている授業研究（共有性）
- ・進め方やルールが明確な授業研究（機能性）
- ・効率的・継続的・効果的な授業研究（効率性）

授業づくりのプロセスについて、お互いの意見を交換し合う教員同士の学び合いは、互いの専門性の向上につながるものと考えられる。担当者だけでなく、できるだけ多くの教員が参加することで、一人一人の教員がもっている児童生徒の情報交換が可能になり、児童生徒を多面的に理解することにもつながる。協議した内容は、それぞれの立場の指導にも生かされていく。

協議の際には視点を共有することが重要である。「今回の授業研究を通して、何を検討したいのか、何を明らかにしたいのか」という問題意識を参加者全員が明確にもつことで、効果的な授業研究につながる。本研究では、「授業づくりの8つの視点」から改善の視点を焦点化して協議を進めることを提案する。

授業研究の充実を図るためには、活発な協議が必要である。資料7は協議のルール(例)である。協議を始める前に、参加者全員でルールを確認することで、お互いを尊重し、

建設的な意見を出しながら協議を深めていくことができる。

資料7 協議のルール（例）

- ・ 授業者の意図，思いや考えを尊重して語る。
- ・ 設定された時間を守る。
- ・ 全員の意見を尊重する。
- ・ 授業での事実を挙げて論理的に語る。（事実と感想を分けて話す。）
- ・ 授業者に敬意を表した言葉で建設的に語る。
- ・ 教員同士が学び合う気持ちで臨む。
- ・ 教員自身の児童生徒や授業の見方，学んだことを交流し合う場である。
- ・ 授業の「おもしろさ」と「難しさ」を共有する場である。
- ・ 一人一人の教員が持っている児童生徒の情報を共有する場である。

効率的な授業研究にするためには，授業研究の流れと時間配分を工夫する必要がある。また，継続的に実施していくためには授業研究の年間計画への位置づけも必要である。個人や担当者同士で授業研究を実施することも効果的である。

(2) 授業研究の方法

授業研究の方法は、校種や学校の規模、特別支援学級等の設置状況により、いくつかの方法が見られる。8人の研究協力員の所属校で実施された授業研究の方法については、表2のとおりである。実施された内容を基に、授業研究の方法を紹介する。

表2 研究協力員の所属校での授業研究の方法

	校種	担当学級等	参加者等	時間	用いた手法等と準備物
1	小学校	知的障害特別支援学級	全職員 (10人)	60分	フレームワーク(マトリックス) ・模造紙, サインペン ・付箋2色(成果, 課題)
2	小学校	言語障害特別支援学級	グループ (担当者等 6人)	60分	授業改善提案シートを使用 ・授業改善提案シート ・付箋3色(成果, 課題・問題点, 助言)
3	小学校	言語障害特別支援学級	グループ (担当者等 4人)	60分	KJ法 ・模造紙, サインペン ・付箋2色(成果, 改善点)
4	小学校	自閉症・情緒障害特別支援学級	全職員 (10人, 2 グループ)	90分	フレームワーク(2つの枠) ・模造紙, サインペン ・付箋
5	中学校	自閉症・情緒障害特別支援学級	グループ (担当者, 数 学科教諭 等8人)	50分	授業改善提案シートを使用 ・授業改善提案シート ・付箋2色(参加者用, 協議に参加できない授業 参観者用)
6	中学校	自閉症・情緒障害特別支援学級	グループ (担当者等 4人)	50分	授業改善提案シートを使用 ・授業改善提案シート ・付箋2色(成果, 課題)
7	特別支援学校	聴覚障害 高等部	グループ (国語科担 当4人)	30分	フレームワーク(4つの枠) ・授業観察記録用紙 ・付箋
8	特別支援学校	肢体不自由 高等部	グループ (26人, 3 グループ)	60分	フレームワーク(マトリックス) ・模造紙, サインペン ・付箋

① 参加者について

表2に示したように、4～10人程度のグループで実施されていた。全職員が参加した学校においても、少人数のグループに分けて協議を行っていた。「少人数で行うことで、意見や質問が出しやすい、過度の緊張感がない、意見もまとめやすい。」との感想があった。(写真1)

全職員をいくつかのグループに分けて実施した際には、それぞれの協議で出た意見等を報告し合うことで、内容に広がりが出る。

複数の担当者がある学校では、「児童の実態を踏まえたうえで、どのような支援ができるかについて、具体的な意見の交換ができた。」との感想があった。また、中学校(自閉症・



写真1 グループ協議

情緒障害特別支援学級)の授業研究では、数学科の担当教諭が参加したことで、教科の視点からの意見が出された。さらに数学科の担当教諭からは、「特別支援学級における教材・教具の工夫が参考になる。」との感想があり、特別支援学級等の指導が通常の学級の指導にも生かされる機会になると考える。

② 時間設定と流れ

参加人数やグループ数、VTR 視聴の有無、講師・助言者の参加の有無で時間の設定に違いがあったが、30～90 分間で実施された。表 3 は研究協力員の所属校で実施された授業研究の「協議の流れ」の例である。VTR 視聴 (写真 2) を含め、60 分間で設定されていた。

表 3 授業研究の「協議の流れ」(例)

時間配分	流 れ
事前	授業参観 (可能な場合), 学習指導案の確認
2'	司会, 記録の決定
3'	学習指導案黙読
5'	授業者の話 (実施した授業について)
20'	VTR 視聴 (付箋に記述しながら視聴する)
20'	グループ協議
10'	支援方法提案, 授業者の話



写真 2 VTR 視聴



写真 3
授業評価表や付箋の記入

参加者全員が授業を参観することが可能であれば、VTR 視聴の時間を省き、協議の時間に充てる方法もある。導入・展開・まとめまでの授業全体の流れを参観することで、様々な角度から授業評価を行うことが可能になる。

時間を有効に活用するためには、司会や記録等の役割を事前に決めておく方法もある。各学校の状況で「協議の流れ」の時間配分等を調整して実施することが必要だと考える。また、多忙な業務の中で、継続した授業研究を実施していくためにも設定された時間配分や開始時刻を厳守していくことが大切である。

③ 協議で用いた方法等

研究協力員の全ての所属校で、付箋を用いた協議が実施された。付箋には成果や課題等の意見を記述し、記録用紙等に貼付して整理していた。付箋への記述は、授業参観時や VTR 視聴中 (写真 3) に行うことが多いが、「協議の流れ」の中に時間を確保する方法もあった。授業参観のみで、協議に参加できない教員からも意見を収集する工夫もみられた。各学校において実施された協議の方法は以下のとおりである。

KJ法

KJ法は、多くの研修会で用いられている方法のひとつである。参加者がカードに意見を記述して紙上に並べ、類型化してタイトルをつけながら意見を整理する方法である。

付箋を使用することで、模造紙等に貼付して固定できるので便利である。付箋は数種類の色を用意し、成果、課題等に分けて記述することで、意見の整理がしやすくなる。写真4は、成果をピンクの付箋、課題を水色の付箋に記述した例である。赤枠で囲んだ部分には、「課題把握」や「板書の工夫」などのタイトルがつけられていた。「課題把握」は「導入・展開・まとめの工夫、単元計画」、「板書の工夫」は「場の工夫」のように、タイトルを「授業づくりの8つの視点」で更に整理することで、どの視点の意見が多く出されたのかを把握し、改善の視点の焦点化を図り、具体的な改善策を検討することができる。

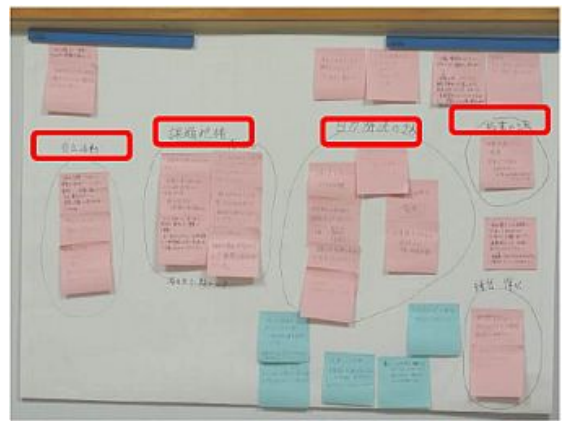


写真4 KJ法の例

フレームワーク

フレームワークとは枠組みのことであり、記録用紙にマトリックスや枠を配置して、意見を整理する方法である。図3は、4象限等のマトリックスを活用した例である。付箋を使用するフレームワークは、模造紙等の比較的大き目の記録用紙に、縦横の座標軸や2×2、3×3等の枠を設定し、参加者が付箋に意見を記述し、貼付しながら、意見を整理していく。付箋は2色用意し、「成果」と「課題」に分けて記述することで、上下のどちらの象限に貼付するかを分かりやすくする工夫（写真5）をしていた。マトリックスを使用することで、意見を「児童（生徒）の様子」と「教員の指導」に明確に分けて記述するので、さらに整理がしやすくなる。全ての付箋が貼付された後に類型化し、タイトルを付ける方法（写真6-①、②）もみられた。

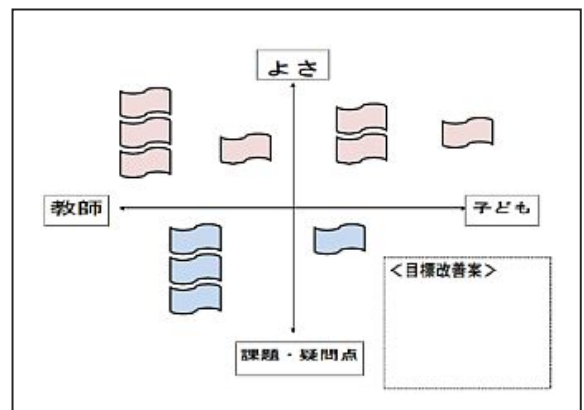


図3 4象限のマトリックス図



写真5 付箋の色分けの例



写真6-① 意見の類型化

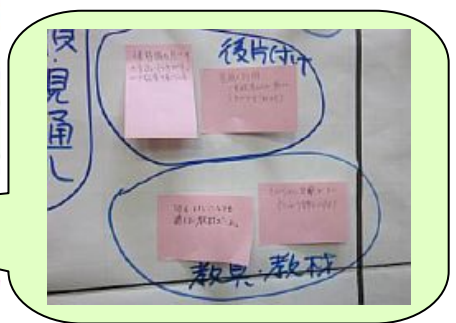


写真6-②

いくつかの観点を示した枠を配置するフレームワークの方法もみられた。

2つの枠を設定するフレームワークの方法（写真7）では、児童の様子を書いた付箋の横に、教員が講じた手立てを書いた付箋を並べて貼付していた。さらに支援の手立ての有効性について協議し、別な手立て（自分ならこうする）を付箋に書いて貼付しながら意見の提案をしていた。

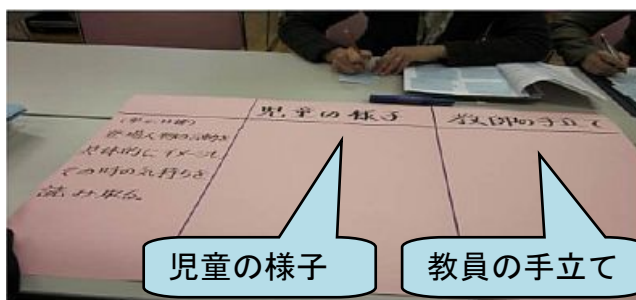


写真7 2つの枠のフレームワーク

写真8は、4つの観定の枠を配置した授業観察記録用紙を活用した例である。観定は「難聴・言語（障害特性への配慮）」、「教材設定・教材解釈／授業展開（構成・評価）」、「指導技術（発問・板書・教材・教具）」、「児童・生徒同士の学び合いへの支援／児童・生徒理解」に設定されていた。参観者は写真9のように、意見を記述した付箋を観定ごとに分けて貼付していた。



写真8 4つの観定の枠を配置した授業観察記録用紙



写真9 授業観察記録用紙の掲示

写真10は、本研究で作成した授業改善提案シートを活用した例である。

参観者は授業参観の際に感じたことを「成果」、「課題」、「助言」の3つに分け、それぞれ色分けした付箋に記述した。

付箋に記述した内容が、授業改善提案シートのどの評価の観定にあたるのかを確認しながら、振り分けて貼付した。協議では、付箋が多かった評価の観定を取り上げ、改善の視点として焦点化し、次の授業に向けた具体的な改善点について、意見の交換が行われた。

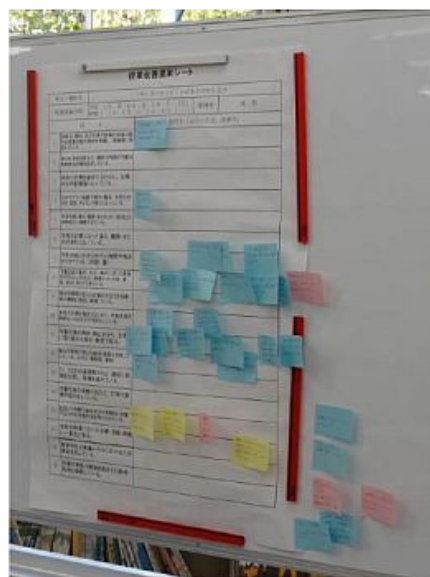


写真10 授業改善提案シートの活用例

具体的な改善策を検討する際の参考となるよう、付箋には児童生徒の様子や教員の支援の手立て等をできるだけ具体的に記述することが必要である。また、建設的な言葉での記述が望まれる。2つ以上の意見が記述されると類型化が難しくなるので、1枚の付箋に1つの意見を記述する。

研究協議の際に、付箋に記述した意見の類型化までで終了してしまうことがある。大切なのは類型化した後に、どの話題を中心に協議を進めるのかを決定（改善の視点の焦点化）して、協議を深めていくことである。

複数の教員で行う授業研究に関しては、時間の確保が課題となるので、担当者が個人で行う授業研究も必要となる。その際には、授業評価表を活用した自己評価を行い、授業改善を行う方法が考えられる。具体的な改善策を検討する際には、「応援ブック」が参考になる。VTR視聴をすることで、客観的に自分の授業を振り返ることも有効である。

学校に複数の担当者がある場合には、お互いに授業参観をして授業評価表を交換することや、授業改善提案シートを活用して意見交換をする方法も考えられる。

4 授業改善のプロセス

「授業評価・改善ツール」を活用した授業改善のプロセスについて、事例を示しながら説明する。2回の授業研究を実施した例である。

P (計画)～D (実施)

第1回の授業を計画（学習指導案の作成，準備物の作成等）し，実施する。

C (評価)

授業評価表を活用して評価を行う。各観点の評価の記入，成果や課題，改善点等を記述する。

授業分析シートに，各視点の評価点を算出して記入し，その結果をレーダーチャートに表す。

授業評価表の記述内容や授業分析シートのレーダーチャート（図4）の結果を参考に改善の視点の焦点化を図る。

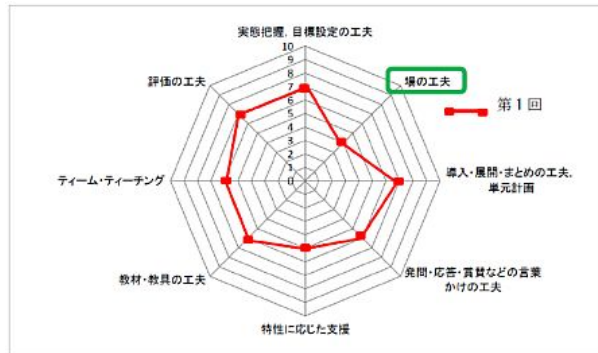


図4 授業分析シートのレーダーチャート（第1回）

図4の事例では，低い評価となった「場の工夫」を改善の視点として焦点化する。表4は授業者の自己評価である。（観点3・4＝「場の工夫」）

表4 授業評価表の一部抜粋

評価の観点	評価	反省
3 本時の目標を達成するために，効果的な学習環境になっている。	2	・活動ごとにいくつかの道具や材料を使ったが，児童がどれを使うのか戸惑っていた。道具の置き場所も遠かった。
4 分かりやすい板書や提示（構成，文字の大きさ，配色，タイミング等）になっている。	2	・学習の流れや活動の手順表は掲示したが，児童の前方に視覚的な情報が多すぎた。また，文字だけの情報も多かった。

A (改善)

授業改善シートを活用して，具体的な改善策を検討する。表5が検討した内容である。

授業改善提案シートに貼付された付箋の意見や授業研究の協議内容を取り入れる。

表5 授業改善シートの「場の工夫」の一部抜粋

「場の工夫」	
本時の目標を達成するために，効果的な学習環境になっている。	
児童生徒の様子，改善したい点	具体的改善策
・活動ごとにいくつかの道具や材料を使ったが，児童がどれを使うのか戸惑っていた。道具の場所も遠かった。	・活動の際の机上の構造化を図り，道具を使用順に並べる。
分かりやすい板書や提示（構成，文字の大きさ，配色，タイミング等）になっている。	
児童生徒の様子，改善したい点	具体的改善策
・活動の手順は掲示しているが，児童はあまり見ていないようだった。	・前方の視覚的な情報を整理する。 ・写真を取り入れた手順表に改善する。

具体的な改善策を検討する際には、「応援ブック」が参考にできる。

授業改善シートに、授業者が改善策を踏まえ、次の授業に向けた新たな評価の観点を追加する。表6が追加した観定の例である。

表6 授業改善シートに追加した評価の観定

A	児童が使いやすいように道具や材料が配置されている。
B	児童に必要な視覚的情報が提示されている。

P(計画)～D(実施)

具体的な改善策を反映させて、第2回の授業を計画(学習指導案の作成、準備物の作成等)し、実施する。

C(評価)

授業評価表には、授業改善シートに追加した評価の観定(表6)をA・Bの欄に記述する。第1回と同様に、授業評価表、授業分析シートを活用しながら、評価を行う。第2回の評価は次の表7のようになった。(観定3・4・A・B＝「場の工夫」)

表7 授業評価表(参観者)の一部抜粋

評価の観定		評価	気付き(よかった点、改善点)
3	本時の目標を達成するために、効果的な学習環境になっている。	5	・道具の場所が作業机の前方に配置されておりよかった。話を聞く場所と活動をする場所を変えたのもよかった。
4	分かりやすい板書や提示(構成、文字の大きさ、配色、タイミング等)になっている。	4	・学習の流れや活動の手順表が写真入りで掲示され、児童にとって分かりやすいと感じた。
A	児童が使いやすいように道具や材料が配置されている。	5	・道具や材料が活動の手順で配置されていた。さらに使う順番に道具の箱に番号が付けられていた。
B	児童に必要な視覚的情報が提示されている。	4	・学習の流れは、話を聞く場所に掲示され、活動の手順表は活動をする場所に掲示されていた。活動が終わった順に手順表の写真を外していくのも分かりやすかった。

追加した評価の観定

授業分析シートのレーダーチャートは図5のとおりである。第1回のグラフに重ねて表示することで評価点の比較ができる。

「授業づくりの8つの観定」は密接に関連しているので、一つの観定の改善の取組が、それ以外の観定の評価点の向上につながる人が多いと考える。

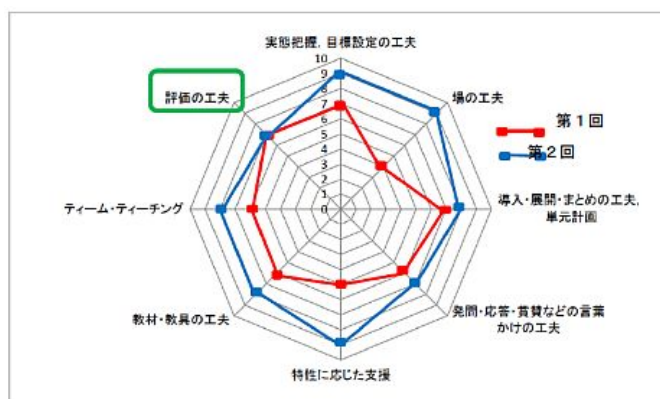


図5 授業分析シートのレーダーチャート(第1, 2回)

A (改善)

この事例では、**授業評価表**の記述内容、**授業分析シート**の結果、授業研究の協議内容から、更なる改善に向けて「評価の工夫」を改善の視点として焦点化した。表8に検討した内容を示す。

表8 授業改善シートの「評価の工夫」の一部抜粋

「評価の工夫」	
児童生徒の学習状況を適切に評価できている。	
児童生徒の様子, 改善したい点	具体的改善策
・まとめの時間に自己評価をしたが、最初の活動を想起するのが難しい様子であった。	・ひとつの活動ごとに自己評価をする。
評価方法(自己評価, 相互評価等)の工夫をしている。	
児童生徒の様子, 改善したい点	具体的改善策
・児童が自己評価をしている際に、教員も評価していたが、それを基にした賞賛が少なかった。	・児童と教員の評価表の評価項目を関連付ける。 ・フィードバックの機会をまとめの時間に設ける。

授業改善を継続的に実施するためには、児童生徒の様子や変容を詳細に観察することが必要である。教員が場の工夫や教材・教具の工夫などに取り組んでも、児童生徒の学びにつながらなければ、望ましい授業改善にはならない。改善の内容が児童生徒の学びにどのような変容をもたらせたのかを記録することが重要である。

具体的な改善策の検討では、実施した授業において有効であった手立てについても取り上げることが大切である。「～ができなかったので～したほうがよい。」という課題の提案だけでなく、「～の手立ては、Aさんにとって、～するのに有効であった。」という成果の気付きも、次の授業に向けての具体的な改善策の検討に生かせる情報となる。

授業改善の取組は、授業者だけでなく参観者の授業力の向上にもつながり、児童生徒の豊かな学びを実現する。

5 授業改善実践事例集について

各事例は、担当者が日常の授業を実施する中で感じていると予想される悩みや願いに対して、考えられる要因や解決のためのアイデアを示し、授業改善の実際を、改善前の授業（Before）と改善後の授業（After）として、基本的に計画（Plan）、実施（Do）、評価（Check）、改善（Action）のサイクル順で示した。中には、「導入・展開・まとめの工夫、単元計画」の視点の単元計画の事例のように、計画（Plan）に焦点をあてて示しているものもある。

一つの悩みや願いに対して、その要因や改善のアイデアは、複数考えられる。授業改善の参考とする際には、複数の事例を参照されたい。

事例に関しては、授業改善のヒントの一例であり、担当している児童生徒や学級の実態に合わせ、柔軟に活用することが有効である。

教科・領域と改善の視点は表9のとおりである。

表9 授業改善の教科・領域と改善の視点

	校種	担当学級等	教科・領域	改善の視点
1	小学校	知的障害特別支援学級	生活単元学習	○場の工夫 ○評価の工夫
2	小学校	言語障害特別支援学級	自立活動	○実態把握・目標設定の工夫 ○教材・教具の工夫
3	小学校	言語障害特別支援学級	算数	○実態把握・目標設定の工夫 ○導入・展開・まとめの工夫、単元計画
4	小学校	自閉症・情緒障害特別支援学級	国語	○実態把握・目標設定の工夫 ○導入・展開・まとめの工夫、単元計画
5	中学校	自閉症・情緒障害特別支援学級	数学	○導入・展開・まとめの工夫、単元計画 ○特性に応じた支援
6	中学校	自閉症・情緒障害特別支援学級	美術	○場の工夫 ○発問・応答・賞賛などの言葉かけの工夫
7	特別支援学校	聴覚障害高等部	国語	○導入・展開・まとめの工夫、単元計画 ○特性に応じた支援
8	特別支援学校	肢体不自由高等部	自立活動	○教材・教具の工夫 ○チーム・ティーチング

授業改善実践事例集は、次のように示した。

改善に取り組んだ視点

担当者が日常の授業を実施する中で感じていると予想される悩みや願いを示した。

改善の視点 「教材・教具の工夫②」

- ゲーム的な活動を取り入れています、児童生徒が主体的に活動に参加できません。
 - 児童生徒の実感がさまざま、同じ活動に取り組むことができません。
- 考えられる要因は・・・
- 段階的な指導ができる教材・教具の作成や場の工夫ができていない。
 - 「自分でできる動き」で操作可能な教材・教具となっていない。
 - ・興味・関心を高める教材・教具になっていない。
 - ・ゲームのルールが理解できていない。

担当者の悩みや願いに対して、考えられる要因や解決のためのアイデアを複数示した。事例では「○」がついている要因やアイデアについての改善の取組になっている。

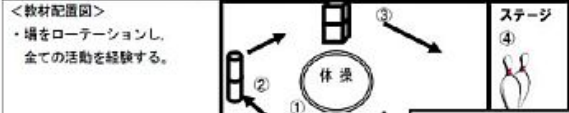
〈特別支援学校 肢体不自由 高等部 自立活動における改善実践例〉

Before

Plan 改善前の授業：題材名「たおして遊ぼう」・第1次「手を使って倒してみよう」 ※14時間扱いの第2時

- 主体的な活動を引き出すための工夫
- ・ボウリングゲーム大会への参加に向けて、段階的な指導が可能な場を設定するための教材・教具の作成と活用

Do ○「手で倒す」段階での、主体的に参加可能な教材・教具の活用と多様な場の設定



①ドミノ倒し



最初のドミノに軽く倒れていく。全てのベルが鳴る。ドミノを遠視することも情報の取り入れが密着することで、全部が達成感が味わえる。

②空き缶倒し



空き缶を縦に積み重ね、倒れ方も大きくように、視覚的な情報も、空き缶の倒れ感が味わえる。

③段ボール倒し



段ボールを縦に積み重ねることで、高さが出て、倒れ方もダイナミックになる。倒せた実感がダイレクトに伝わり、達成感を味わえる。「押して倒す」→「壊れる」という因果関係を学ぶ段階のため、足もめ、自分の一番得意な動きで倒すことで実施した。

④ボウリングピン倒し



本題材の最終目的であるボウリングゲームの前段階として、ピンを手で倒す体験ができるようにした。ステージ上に場を設定することで、倒れたピンが後ろのピンを倒す様子を間近でみることができる。

Do：改善前の授業の様子

Check：改善前の授業の評価、◎は成果、▲は課題を示した。

Action：Checkの課題について、授業改善シートを活用して検討した具体的な改善策を示した。

Plan：改善後の授業の単元（題材）名、授業改善の内容を具体的に示した。

Check ◎ベル音を目標にした「ドミノ倒し」に興味・関心をもつ生徒が多かった。「最初のドミノを倒してから、ベルが鳴るまでの時間差」が、「ボールを転がしてから変化がおこるまでの時間差の存在」がある「ボウリングゲーム」と共通しているため、第2次以降も主となる教材として使用していく。

▲ボウリングピン倒しでは、視線の位置に合わせてステージ上にピンを並べ、フロアから手を伸ばしてピンを倒す環境設定を行った。身体の向きがピンに正対することができない生徒にとっては、難易度の高い教材になってしまった。

▲ボウリングゲーム大会への参加に向けて、ボールを自分の力で転がすことができるような支援が必要である。

Action 改善のポイント

- ・「ボウリングゲーム大会への参加」に向けて、小さな力でもボールを転がすことのできる教材・教具を作成する。
- ・大型のテーブルを使用し、机上でボウリングを行えるように環境設定を行い、ピンに正対した姿勢がとれるようにする。
- ・生徒の実態に応じ、ボールを押す力のレベルに合わせて、スロープの傾斜が調整できるような教材・教具を作成する。

After

Plan 改善後の授業：題材名「たおして遊ぼう」・第3次「ボウリングをしよう」 ※14時間扱いの第12時

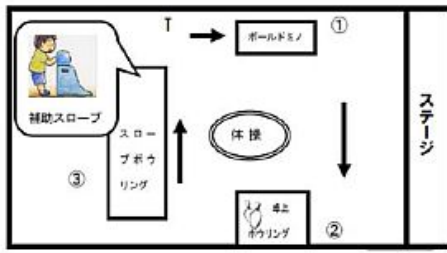
- 段階的な指導ができる教材・教具の作成
- ・ボウリングゲーム大会への参加に向けて、ボールを転がす動作を段階的に指導できる。
- 「自分でできる動き」で操作可能な教材・教具の作成
- ・生徒の実態（ボールを転がす力）に応じたスロープの傾斜の調整ができる。

Do

○「ボールを使って倒す」段階での主体的に参加可能な教材・教具の活用と多様な場の設定

<教材配置図>

・場をローテーションし、全ての活動を体験する。



「応援ブック」の関連するページについて、前研究のキャラクター（なっとくん）が示している。

①ボールドミノ



スタート応援ブック
～授業づくり編～
P44～を参照

手で押していたドミノ倒しを改良した。ボールを押すことで、最初のドミノに当たり、連続的に倒れていく。

Do：研究協力員の具体的な改善の取組について、写真を示しながら紹介した。

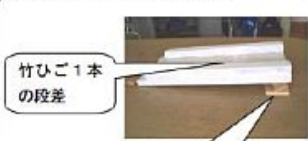
個に応じた教材・教具の活用



卓上ドミノ専用のドミノに触が止まるよう

②卓上ボウリング

個に応じた教材・教具の活用



竹ひご1本の段差

生徒の力に応じて傾斜を調整

Do

③スロープボウリング



スロープを活用することで、ボールを小さな力で押しても、スピードが出る。スロープの向きでボールの転がる方向も決まるので、ピンを狙いやすい。ピンまでの距離があるので、ボールを転がしてからピンが倒れるまでの時間差が実感できる。生徒の手の力に応じた補助具を活用した。

個に応じた教材・教具の活用



筋緊張等により押し出す動きが困難な生徒のために、紐を引くことでボールを転がすことができる教材・教具を作成した。

Check

◎「自分でできる動き」で「ボウリングゲーム大会」に参加することをねらい、「ボールドミノ」「卓上ボウリング」「スロープボウリング」の各活動における教材・教具を作成・活用した。自分が起こした動作で、物に変化を生じさせることを実感させることができたことで、多くの生徒が主体的に活動しようとする様子がみられた。
▲ボールドミノは他の活動と比較し、ボウリングの雰囲気を出せていなかった。ドミノの板をピンと見立てる（ピンが倒れて、更に後ろのピンを倒すイメージがもてる。）などの工夫があると更によかった。

Action

改善に向けて
ドミノ教材に「ボウリング」のイメージを追加することで更なる生徒の興味・関心を引き出せる可能性がある。

更なる改善



児童生徒が自分でできる動きを生かして活動できる教材・教具を活用しましょう。主体的な活動を引き出し、意欲的に取り組めるでしょう。目標となる動きが引き出せるように、段階的に難易度を上げることが可能な教材・教具の工夫・改善をしてみましょう。



Check：改善後の授業の評価、◎は成果、▲は課題を示した。

Action：次の授業の改善に向けての改善策を示した。

事例における改善のポイントについて、なっとくんが解説している。

6 研究のまとめと今後の課題

本研究では、前研究における課題を受けて、PDCAサイクルに基づき、改善の視点を焦点化した授業改善の在り方についての研究を進めた。

授業改善を進める際の手立てとして「授業評価・改善ツール」を作成し、それを活用した授業改善のプロセスについて提案した。「授業評価・改善ツール」を活用することで、改善の視点の焦点化が図られ、より具体的な改善策を検討できるようになり、次の授業計画に生かせるものとする。担当者が一人で授業研究を進める際にも、「授業評価・改善ツール」の活用が考えられる。

授業研究についてはいくつかの方法を紹介した。各学校の状況に応じた方法を工夫し、継続的に授業改善に取り組んでいくことが大切である。担当者による授業研究を積極的に実施することで、児童生徒の交流学級の担任や教科担当者との情報交換が可能になり、児童生徒を多面的に理解することができる。授業研究での協議を充実させるためにも、事前に授業評価表で評価の観点を示しておくことが必要である。授業研究は、特別支援学級等の指導や支援の方法が、通常の学級の指導にも生かされる機会になると考える。

8人の研究協力員と所属校には2年間にわたり、授業改善への取組と事例のまとめについて多大なるご協力をいただいた。授業改善の取組をまとめていく中で、授業づくりの土台となるのは「実態把握」であることを再確認できた。例えば、「教材・教具の工夫」に改善の視点を焦点化した場合には、「児童生徒の興味・関心の高いもの」や「教材・教具の難易度設定のための学習レディネスの状況」などの実態把握を改めて実施することが必要である。授業づくり、授業改善を進める際には様々な角度から、的確な「実態把握」を実施することが重要だと考える。

今後の課題としては、次の事柄が挙げられる。

- ・本研究での授業改善のプロセスや授業研究の方法を紹介し、より多くの担当者に広めていくこと
- ・授業評価表の各観点について、評価の妥当性を高め、具体的・客観的な評価ができるように、さらに検討を加えていくこと
- ・本研究で作成・活用した授業評価・改善ツールをより使いやすいものにしていくこと

特別な教育的ニーズのある児童生徒に対して、より適切な指導を提供できるよう、担当者には更なる専門性の向上が求められている。特別支援学級等での授業づくりや個に応じた支援は、通常の学級における特別な教育的ニーズのある児童生徒の支援にも生かされていくものとする。そのためにも、前研究の「応援ブック」の活用と合わせ、本研究で提案した授業改善のプロセス、紹介した授業研究の方法、授業改善実践事例集を参考に、授業づくりや授業改善に継続して取り組むことが、担当者の授業力の向上や授業の充実につながるものとする。そして、担当者の取組が、特別な教育的ニーズのあるすべての児童生徒の生きる力の向上につながることを期待する。

7 参考・引用文献等

宮崎 英憲監修 是枝喜代治編著

「〈特別支援教育〉個別の指導計画を生かした学習指導案づくり」明治図書 2014年
川喜田 二郎著

「発想法 創造性開発のために」中公新書 1967年

鹿児島大学教育学部 肥後 祥治 雲井 未歆 片岡 美華 鹿児島大学教育学部附属
特別支援学校 編著

「特別支援教育の学習指導案と授業研究」ジアース教育新社 2013年

藤原 義博監修 武蔵 博文 小林 真編 富山大学教育学部附属養護学校著

「子ども生き活き支援ツール～きつとうまくいくよ、移行・連携～」明治図書 2004年
太田 正己著

「〈チームの授業〉をつくる「解釈」のアイデア」明治図書 2010年

吉澤 準特著

「フレームワーク使いこなしブック」日本能率協会マネジメントセンター 2010年

独立行政法人教員研修センター

「教員研修の手引き『研修の企画・運営 講師のための知識・技術』」2013年

文部科学省 中央教育審議会 初等中等教育分科会 特別支援教育の在り方に関する特
別委員会

「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推
進（報告）」2012年

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

「自閉症・情緒障害特別支援学級における自閉症のある児童生徒に対する国語科指導の
実際」2012年

「インクルーシブ教育システムにおける教育の専門性と研修カリキュラムの開発に関す
る研究」2013年

「インクルーシブ教育システム構築データベース」2014年

茨城県教育研修センター 平成23・24年度特別支援教育に関する研究

「特別支援学級における授業の実際」－特別支援学級スタート応援ブックの作成－

2012年

「授業研究の進め方－発問や助言の仕方の授業研究のあり方－」

大阪教育大学 松本 勝信

関係者一覧

- | | | | | |
|---------------|------|-----|----|------------|
| 1 研究助言者 | | | | |
| 東洋大学 | | 教授 | 是枝 | 喜代治 |
| 2 研究協力員 | | | | |
| 笠間市立佐城小学校 | 教諭 | 石本 | | 美香 |
| 日立市立油縄子小学校 | 教諭 | 原 | | 努 |
| 鉾田市立旭東小学校 | 教諭 | 本城 | | 知子 |
| 石岡市立恋瀬小学校 | 教諭 | 蒲原 | | 裕子 |
| つくば市立豊里中学校 | 教諭 | 鈴木 | | 恵子 |
| 常総立石下西中学校 | 教諭 | 渡辺 | | 小百合 |
| 県立水戸豊学校 | 教諭 | 齋藤 | | 敏子 |
| 県立下妻特別支援学校 | 教諭 | 飯島 | | 伸介 |
| 3 茨城県教育研修センター | | | | |
| | 所長 | 武井 | | 一郎 |
| 特別支援教育課 | 課長 | 鈴木 | | 栄子 |
| | 課長 | 谷田部 | | 孝子(平成25年度) |
| | 指導主事 | 奥岡 | | 智博 |
| | 指導主事 | 外山 | | 薫 |
| | 指導主事 | 大木 | | 勉 |
| | 指導主事 | 舘 | | 美穂子 |
| | 指導主事 | 藤森 | | 幸子(平成25年度) |

研究報告書第87号

特別支援教育に関する研究
特別支援学級における授業の充実
平成25・26年度

平成27年3月

編集 茨城県教育研修センター特別支援教育課

〒309-1722

茨城県笠間市平町1410

TEL 0296(78)4437 (特別支援教育課)

FAX 0296(78)2122

URL <http://www.center.ibk.ed.jp/>